

2011年度ヤング・ポートフォリオ 選考を終えて

鬼海弘雄 都築響一 細江英公 司会:石井仁志

石井：本年、3月11日の東日本大震災以降、あの地震、津波、そして原発被害の現場から、日本人は物心ともに大きなダメージ、精神的苦痛を受けたように思います。また、いろいろな報道でもいわれてきましたが、被災者の家族アルバムに対する思いなどを伝え聞くにつけ、写真の価値が変化したように感じました。モノとしての写真をどうあつかっていくか、パーソナルコミュニケーションとしての写真というものの次元が日本人の中で変わってきているのかもしれません。そういう状況の中でヤング・ポートフォリオの本年度の選考を終えて新たな永久保存作品が購入されることになりました。フレッシュな感想をお聞かせ願えればと思います。どうかよろしくお願ひいたします。

鬼海：全体的に言って、皆写真家になりたいっていうか、写真を撮って新たに世界を見るというか、そういうちょっとね、北斗七星が少ないというかね。こうやって写真を撮って今までの10倍の人間関係とかとは違った形として写真を表現として使いたい。あくまでもこの撮っているのは写真に慣れた人で、写真転用という頭があって、何かこう見たら人間がもう少し自由になるんだろうなあという遠い視線、価値観が、まあ前面に立つとまずいかもしれないけれど、どこかでそういう羅針盤を持っていないと、いつも時代時代のトレンドの波に流されやすい。やっぱりいつも個人で写真をやっているわけだから、小船に乗ってこいでいるみたいなもので、いつも舳先ばかりを見ていると方向感覚を間違う。どこか遠い視線でゆっくり呼吸をしながら魯をこいでいく、というのがちょっと足りないかなと思っておりました。

都築：いいことをおっしゃいますね。いやあ、僕は結構反省しましたね。この人たちはものすごくまじめに写真と取り組んでいる。僕のほうがかなりいい加減だなと思いま

したね。自分がね。まじめに取り組んでいてもちろんいいのですが、もっと狂った写真が出てくるかと僕は思ったんですよ。ヤングだし。これヤングじゃないもんね、あんまりね。偶然年が若いっていうだけで、かなりのベテランという感じが皆さんからしますしね。僕なんか55歳ですけれど、こういうのがあったかみたいな、若くないと生まれない発想とか、若くないと撮れない題材とかね、そういうのって不思議にないですよね。例えばエロとかないでしょ。今回一個も。

細江：そういえばそうだね。

都築：だから、それからもう何だか全然わからないってものも、普通アートの世界にはあると思うんですけど、これだけ僕たちと年代が違うんだから、もう良いのか悪いのか理解できないというのがバーンと提出されるのかと思ったら…ない。その辺ですごいまじめなのかとも思うし、前にお聞きしたら、ある程度前段階で落とす作品があるということでしたが、そこにもしかしたら、お宝が眠っていたのかもしれない、(笑)とも思う。前段階で落とすというところで、ある意味レベルの足切りがあるわけで、その中に狂ったような面白い作品があるのかなという感じがちょっとしましたね。

鬼海：今年は亀山亮君^{*}は出してましたかね。ああ出てましたか。写真とは芸術的写真だけでなくね。ある現実を知るという意味合いが大事でしょ。今の写真雑誌あたりでは、そういうしたものに対して評価が低いですね。やはり人間を考える足がかりとして写真はあるんだというところがなおざりになっているような気がします。写真藝術もどきのような温室の中に入っている観葉植物のようなものだけではない。やはり人間の世界はどうなっているかという問題が同レベルで論じられてしかるべきだと思うのです。

都築：でもね、両方あると思うんです。やっぱり写真を鬼海さんの言うようにペン代わりに使う人もいるし、カメラを楽器のように使う人もいていいわけですよ。カメラを使って他の絵画などでは表現できない画面を作るという人がいてもいいわけですよね。両方ないとおかしいと思うんです。逆にこういう人が少なかったですね。

細江：そうですね。そういういわゆる芸術としての写真、自己表現としての写真という部分が例年に比べて少なかったようですね。

都築：なんで少なかったのでしょうか。

細江：はっきりはわかりませんがね。ひとつには、例えば東日本大震災に関する応募がかなりありました。そういうような現実がそのまま目の前にあって、自分の頭の中の世界を表現するものをちょっとセーブして現実を見直そうというような流れがあったの

*写真家、1976年生まれ、1999年からヤング・ポートフォリオにて133枚作品収蔵

かもしれませんね。それにしても、ないものねだりかも知れませんが、全体的に激しさといったものが欲しかったなあと思いますね。先ほどもお話に出て来ましたが、ある意味ではしっちゃかめっちゃかというか、今までの尺度では測れないような、若いからこそできるある種の発言、かなり極端な表現、これもいつでも求めているのですが、今回は少しおとなしかったように感じます。しかしある種の、写真の完成度という点から見ていきますと、ほおー、これがこの若さでできるのかなというような、感心させられるものもありましたね。

石井：例年の選考の現場と比較しましてね、例えば韓国作品や近隣東アジアの国々からの応募が少ないかなと感じましたね。韓国からは毎年面白い作品が出ていましたから、余計に残念に思ったのですが。それに対してバングラデシュからは沢山の応募もあり、活況を維持しているように感じられました。その辺について御意見はございますか。

細江：それはおっしゃるとおりですね。多少ね、アジア諸国の作品には比較的おとなしい作品が多かったね。今までは、へー、こういう表現があったのか。ここまでやるのかといったような、かなり大胆な作品もあったりして、そういう意味ではアジアの中から新しいものがもくもくと生まれてきたような興奮を味わった時期もあって、でも今回はちょっとおとなしいかな。

都築：だけど、日本と特に中東、イスラム圏とはこの1年間ものすごい激変があったわけですよ。あっちの革命もすごい大きなものですからね。さきほど細江館長がおっしゃったように、やはり大きな激動があればそちらに、どうしても行くのかもしれませんね。逆に東アジアでは日本だけが激変を味わったもので、韓国、台湾、中国などはそれがなかったですからね。そういう影響もあったかもしれません。

石井：震災についても来年度の応募にまとまった作品群が寄せられるかもしれませんね。

細江：そうですね。3月11のことですからね。募集期間中に間に合わなかったということもあったでしょうからね。でその、震災直後や、その後まもなくの現場だけではなく、何ヵ月後、半年後といった両方の比較、時間をここに加えたようなドキュメントが出てくるかもしれません。単に事件写真というものではなくて人災と天災が一緒にになったような大きな災害ですからね。原発の人災によって起こったいろいろな問題を解く上でも、事件の視覚的な証明として写真が使われるというケースもありますね。ですから今年の日本での写真というのは例年とは違った形の写真が現れてきたのかもしれません。その中で芸術写真というか、日常の場とは違ったところで普遍的意味合いで追求される、今までにない価値観を含んだような写真を創造するといった力がね、今回は一歩後退したのかなという感じを持ちましたね。

鬼海：撮っている人が、全体が、他者の評価を最初からすごく気にしている。自分をもう少し煮ろ。鍋でぐつぐつ、ぐつぐつとね。誰も見て評価してくれなくてもいいんですよ。自分の作品は自分評価というか、そのときの自分というのは他者の視点がないと自分にならないですね。自分を見るということは他者をどれだけ理解するかとほとんど同等なので、それがちょっとバランス悪いかなと思います。何も褒められなくとも、自分ではこれはずーっとこの道をゆっくりと歩いてゆく。自分の歩幅を見つけて歩いてゆくことが大切なんじゃないかと思います。だから今回ここにある写真を見ていてムーディな作品が多いかなと思いますね。

都築：先ほどの補足になってしまいますが、例えば音楽や美術の世界でもそうですけど、年齢で30歳違ったらほとんど理解できないものが出てきますよ、多分。僕が50でハタチのやつらが作ってくる音楽とか何か圧倒的に違うと思うんですよ。今回の写真にはそういうのはなかったですよね。でも日本の場合、こういう大事件があったわけで、その影響ということも充分わかりますが、逆に細江館長にお聞きしたいのですが、震災関連の写真がいくつかありましたね、その中で選考途上で話も出ましたが、やはりこういう素材というのは人と違う写真を撮るのが難しいじゃないですか。誰がとっても圧倒的な素材なわけですから。その中でも優劣が決まったわけですね。その優劣って何なんでしょうか。

細江：やっぱり目でしょうね。アングルがどうだとか瞬間描写がどうかとか、表現上のテクニカルな問題ではなく、それに自分がどう対処したかという問題でしょうね。それが写真上に出たときに個の目と対象との関係がもっと際立って出てくる。そこででしょうね。すでにこの事件の写真は、写真集すらどんどん出ていますから、ですからすごい作品は沢山ありますよ。そういう中で若いからこれができるといったものがあれば、はじめて美術館のような立場としてはそれを高く評価しますよ。ですからドキュメンタリー作品の難しさというのは、ジャーナリストイックな意味での価値観、そこに時間というものが経過して、発表時の問題の膨らみを付加した価値観とでもいうもの、それから個々の悲劇的な事件であれ、そこの人間の持つ普遍的な事故などに対するリアクション、そういうものを鋭く深く表現するもの、僕らはそういうものにこそ感動するわけです。これからそういうものが生まれてくるのではないかと希望を込めて思っていますよ。

都築：高木忠智さんでしたか、震災の大きなパノラマ写真のような作品がありましたね。かなり粘っていますよね。時間をかけて、あれだけのものを作ったという感じですね。同じところに出かけて、同じ事象を見て、カメラの性能や値段なども関係なく、だけれども差が出るというのは面白いですね。お聞きしたように目の違いでしょうか。何を考えてそれを見ているのか。どれくらいそこに突っ込んで行ってるのかとか、おな

じ条件下でも差が出てくるということですね。

石井：選考過程の中で、各先生からもう少し選んで応募して来ればいいのになという声が聞かれましたが、そのあたりについてお伺いできますか。

都筑：まあ、自分が若い作家だったら制限めいっぱいの枚数で応募してくるのはわかりますが、わかるけれども違うんだよね。やはり、こういうふうに写真を見てもらう場合は、写真展をやる場合でもそうですが、プレゼンテーションの技術もありますね。撮っただけではなくてね、言い換れば編集の技術もある。だからこれだけの写真をこういう順番で見せたらどういうふうなものが伝わるかということ、これはないほうが感覚が濁らないのではないかというようなことを少し考えてもらったほうがこちらにも伝わってくるような気がする。それが気持ちだけが先行してどんどんこれも入れる、あれも入れるという感じになって、かえって逆効果になっている場合があったね。

鬼海：いやあ、とにかくいっぱい単語さえ出してくれば、こっちが勝手に詩を作ってくれるという感じ、詩を作るというときは厳密に言葉を選んで、経験で作り上げるわけで、そういう感覚はぜんぜんなくて、万が一これを拾ってもらえば得するかなという。自分で自分を縛って、これはここで一本の作品にするというのがなくて、これとこれは一緒じゃないだろうという散漫ね。それは飛躍でもなくて、まあ何でこの人がこの写真を撮るんだろう、この写真とこの写真血液型が違うんじゃないかなという、そういうのが入っているよね。

都筑：僕なんか本業が編集者ですから、特にそう思うんですが、最近、組写真という考え方があんまりないですよね。昔は組み写真というのを考えましたよね。撮るだけではなく見てもらいたいわけですからね、ストーリー展開みたいなものも技術のうちだと僕は思うのですがね。

細江：組み写真というより今は群写真だね。それで、ここでは審査で選ぶほうがある程度その編集をして、これはいらない、これはいる、というようにひとつの文脈をつくっていく。応募では曖昧だったものを、結果として10枚で来たものを5枚にしたり、20枚の群を8枚にしながら明確な文脈をつくっていくことが大切ですね。単に減らしていくという意味ではないわけですよ。特に今日は編集上のプレゼンテーション、見せ方に優れたお二人の選考ですから、購入した作品を見ると、見事な編集がなされていると感じました。若い作家諸君には、美術館でいずれこれらの作品はさまざまな機会に展示されますから、自分の作品がどのようにセレクションされ、どのように展示構成されているかということをぜひ真剣に見に来ていただきたいと思います。

鬼海：そこがね写真家の仕事ですよ。あとはカメラで写すんではなくて、やはり写真家も言葉で。それは文章のような言葉でなくともいいんだが、言葉でないものは写真は写らないですよ。

都築：だから、僕たちがこれはもう落とせないというところで出してきてくれるとね、すごいということですよ。例えば、僕は本を作るために写真を撮っているわけです。なので撮りながらもうページ構成を考えているわけです。この写真は大きく使うからちゃんと撮ろうとか、これはこのくらいのクオリティでとかね。作家には撮ったり応募する際に、例えば自分の作品の中のこの作品数で展覧会の壁をひとつ作るとしたらどういうふうになるのだろうというのを考えて欲しいです。誰でも目標を持って撮ってもらいたい。構成や選択をきちんと考慮して最終地点をしっかり想定して追い込んでもらいたい。その追い込みが足りないですね。

鬼海：他者に見せるわけでなくて、写真家自身、キュレーターとしての自分の遊び方もあるわけですね。

細江：そうですね。応募者の方々には、自分が送る作品の最終的な構成を何回もいろいろな形で試してみて、枚数やレイアウトや題名キャプションなどももっともっと工夫して欲しいと思います。

鬼海：作品を作った後ではなくて、作品を作る過程でもそういう遊びをしないとダメなんですよ。自分の写真でも、昔撮ったものをネガで見ると改めて何でこれを落としていたんだと思うこともありますからね。

都築：編集者に選ばれてなるほどと思うこともありますから。

細江：絵画を一点選ぶのとは違ってね、写真の使われ方の多様性や、写真の持っているドキュメンタリー性や解説性だとかね。雑誌の場合と写真集の場合では構成の仕方も変わってくるしね。つまりそういう写真の奥深さがあるから、若い写真家たちがいろいろ研究していったらもっともっと写真は面白くなるね。

石井：問題意識としてお聞きしたいのですけれど、原初的なところで、その精神性とでもいいましょうか。写真を撮るという行為についてどうお考えですか。選考で感じられたことを踏まえてご意見がありましたらお願いします。

鬼海：写真を撮るということは、それとまったく同じに写真を撮らないという意味と並列になっている。これは私の写真ではないからこれは撮らないという明確な基準がある。これを撮れば写真の80点、75点は撮れるなではなくて、敢えてこの写真は私の目



選考委員

左から 都築響一、鬼海弘雄、細江英公(館長)

From left: TSUZUKI Kyoichi, KIKAI Hiroh,
HOSOE Eikoh

ではないから撮らないという姿勢です。アマチュアの人たちは何でも撮りますよ。しかし写真を撮る行為は、降った雨が山を削り大地を削り大河になって流れていくような行為ですよ。その自己運動をバラバラにすると水溜りはたくさんできるけれど一連の写真の流れは希薄になります。これは私の写真ではないから撮らないという、撮ると撮らないとの決断が私の場合いつも拮抗していますね。

都築：まあ僕なんかの場合は逆ですね。仕事柄もそうですが、写真を見飽きてるくらい見ているわけですが、例えば今回選んだ震災のアルバムの写っていた写真、いつもはそう感じていなかったのに、いかに大事なものになりうるかということですね。ただのスナップや、どうでもよかったものが、何かのきっかけで突然重要なものになりうるということを思い出させてくれましたね。

細江：神戸の震災のときには。印象深かったのは、着の身着のままで逃げ出して助かった人が、テレビのインタビューで答えていたことだけど、ひとつ本当に残念なことがあったというのね。自分の人生と裏表にある家族写真の詰まったアルバムだけは持ってきたかった、涙ながらに語ったおばあさんを忘れられない。あの言葉には写真家として感じ入りましたね。写真の力、写真を撮るという行為について考え直す機会でした。

石井：最近の写真現象で避けて通れない問題でもあり、よくお聞きするのですが、アナログとデジタルの問題、それにかかる色の問題など、どうお考えですか。

都築：今、日本では普通に写真を撮っている人たちは多分9割くらいはデジタルを使っているわけですね。プリントよりもまず、パソコンのモニターで見るわけですよ。発色が印画紙とはまったく違うわけですよ。どちらが良い悪いではなくて、現在過渡期

ですよね。当然ながら、印画紙の発色に満足できない若いカメラマンも増えてくるとは思いますね。

鬼海：いやいや絶対モノクロですよ。（大笑）モノクロしかない。

都築：最近ではモノクロ用のインクジェットプリンターって、ものすごく綺麗なのがあるじゃないですか。

鬼海：私は百姓の生まれだから、仕事っていうのは何事か手仕事の部分がないと。自分の技とかを使って仕事について何かを濾すという時間がぽつんぽつんと絶対あって、それは手仕事という形を、体を使ってやる形でないと吟味できないし、そのくらいの時間がないと物事を醸すという形のものはできないわけです。一瞬一瞬の形の情報的な写真はデジタルでいいんだろうけど私はやっぱり絶対モノクロ主義ですね。やはり暗室に入っていて濡れてるときの印画紙のあのモノクロのきれいさといったら、こりゃ見事なもので自分でもうわーってうなってますよ。（笑）

細江：いやあ、今のはアナログ論の極地ですね。触れるもの、手でもてるもの。これはやはり、圧倒的に強いと思うな。

都築：例えば昔は財布に入れてた手札版の一枚の写真といったものの価値観がね、今の子たちにとっては、携帯の待ち受け画面だと思うんですよ。一番好きな人とか、愛するペットとかね。これはもう手札版のプリントではなく、LEDのディスプレイの発色でイメージを見ているんですよ。だからもう目が変わってきているんだと思います。ですから、ここに集まった写真を見ていると新しいディスプレイやモニターの色とかデジタルの色で捕らえている写真があんまりないなと思ったんですよ。すごくクラシックというか、オーソドックスなスタイルが圧倒的に多いですね。今の僕の周りでバタバタ仕事している20代、30代のカメラマンたちとすごく違うんですよ。こういう発色のこういう作品って撮らないですよ。この感覚のズレってなんなのでしょうね。印画紙による銀塩のプリントで展覧会場にバッとかかっているのが最終形と思っていない人が増えているのかな。

細江：ひとつには、本当に良い作品を見たことがない若者があまりにも多いんですよ。これは決定的ですよ。だから我々のような前の世代の人間が、啓蒙していかなければならぬと思います。このオリジナル・プリントはね、見て、触れるものですよ。アナログの感覚ですが、この強い感覚は人間の肉体が幻影でない限りはどこまでも続くと思うのです。これを原点、ベースにして進歩させるべきではありませんか。デジタルとアナログの問題でもね、適材適所で使われればよいと思えます。それぞれの特色を活かして

最終的に作家が納得できればいいでしょう。今までにない視覚的表現ができれば、機材やカメラは何でもいいと思います。選考を終えてみれば、とにかく今年はやや保守的でしたね。あまり実験的作品は少なかったかな。

都築：とにかく僕は今回一番驚いたのは、ヤング感覚があまり感じられなかっただことですね。老成したヤングという感じ、例えばうまくなくても、若いやつらじゃなければおくれないライフスタイルから出てきたような写真とかね。こいつらなにやってんのみたいな、僕たちではどうしても入れないような社会の中から出てくるようなイメージですよね。鬼海さんは全然納得してないでちょうどけれど。

鬼海：ええ納得してない。(大笑)まあ、時代とともに流れていく写真があってもいいのだけれど、時代を超越する写真がほしいですよ。飯が食えなくとも写真にのめりこんでいって、いい作品を作っていく。いいものってじゃ何といえばわからないけれど、何人かいる先達に対して、ライバルとして食らいついでいきたいね。わたしは田舎者だからそう思うんだよな。(笑)

細江：美術館としては本質的にクリエイティブなものが欲しいんですよ。すごい表現、既成の写真の方法論では表現できないようなものを。これはこのようにしてやれば写真の表現の幅が広がって見えるじゃないかというようなところですよ。

鬼海：都築さんの写真と私ではずいぶんと離れているような感じだけれど、都築さんは奇妙なものを追いかけていても、その価値観の中で人間の自由さや人間のこわばった感覚が解放されるところを、ぶれない感覚で撮っているよね。私もそう思うわけで。

都築：一緒でしょ。

鬼海：まあ一緒じゃないけど。(大笑) 基本的に一本の線で彼は彼の羅針盤でまったく違う北斗七星の中でやってるわけではない、私は六分儀でやってるけど。まあ、価値観は違うけれど、多分いいものに会ったときに、これはいいという判断は一致すると思いますよ。

石井：それでは、この辺で気になった作品や作家について購入作品で振り返って感想をお聞きしたいですね。

細江：關口寛人さんの作品ですか。《babies》(pp.56-57)というね、あの老人たちが人形を抱いているポートレイトですが、人間的な接触の中にこのおばあさんなどは人形を乗り越えて人間を見ているようですね。老人の孤独ともいえない、過去の思い出だけともいえない。言葉では何ともいえないものがこの作品に全部出ているんだ。写真表現の

力強さも持っているわけだよ。

都築：そうですね。それからバングラデシュの方々など、だいたいもう少し枚数を絞って出してきてほしかったんですけどね。量がものすごくあって、結局モノクロのシリーズ、カラーのシリーズがあって、意図がわからなくなって、彼らが結局損しているような気がしますよ。たくさん出してる作家はこっちに一番何を見てほしいのかということがわからないケースが多くて残念に感じました。

細江：K.M.アサドさんの顔のクローズアップだけど、鬼海さんもモノクロ作品だけど、あなただったらどうですか。

鬼海：ノーマル現像で、こういうコントラストをあげないし、こういう距離感はとらないですね。私の声色とは違いますね。

都築：この人は顔の皺を出したくてこれを撮っているわけでしょ。明確にいいと思うのは何を見せたいかにテクニックが付いてくるということですよ。最初にテクニックではなくてね。だから皺をどう見せるかでこういう調子が出てくるわけで、それがはっきりしているので、ぶれがありませんよ。鬼海さんのような撮り方ではこうはでないですよね。

鬼海：そう、出ませんね。えーと、わたしはこのポーランドの作家、アダム・パンチュクが好きですね。この作品と作品の間の時間を感じさせるでしょ。わりと静謐な感じでいいんですよ。顔がいいでしょ。写っているものの。

都築：僕なんか思ったのは、これは映画のスチールのような感じに思いました。映画のスチールというのは、一連の芝居の中でスナップしたように撮っているけれども、実はそのシーンで動かないで撮ったりしているじゃないですか。だからドラマチックでオーバードramaになると思います。時間を感じさせるな。

鬼海：やっぱり人物と風景とか背景とかよく読んで撮ってますよ。絵心ありますよ。

細江：絵心というより写真心だね。いやあ、得がたいですよ、これらの作品は。川本健司さんの《よっぽらい天国45》(pp.54-55)もいいよ。酔っ払っている人間はいかに幸せかということをつくづく感じさせてくれるよ。人がたくさんいるところでしょう。皆見ているわけだ。

都築：まずこの人は一生この写真撮ってほしい。ワンアイデアじゃだめなんだよ。ワンアイデアで始まってもいいから、ずっと20年ぐらいは撮り続けてほしいな。撮り方を見てもかなり考えてますよ。

鬼海：こういうものばっかりね。写真の圧倒的な量で見せてほしいな。

細江：この人はやっぱりカラーで撮り続けてほしいな。この色彩でごちゃごちゃしたこれだよ。リアリティだよ。ほら、こちらはスペインの作家でルシア・エレロ。これこれ、家族の写真、日中シンクロの作品だよ。家族の構成、関係性が面白いよ。親父の背中にこれ、何か塗ってるんだね。オイルかね、これなんか寒そうに見えるよ。いいねえ。

都築：浜辺で撮った家族ね。僕はこの作品はすごく古典的な感じがするんですよ。ゴヤなんかの肖像画のような、伝統的な美意識を持つてゐるなあと感じます。

鬼海：私好き。古典的で遊び心があるし、確かな技も使って、構図もピシーッと決めてる。なかなかですよ、でもモノクロだったらつまんないですよ。

細江、都築：そろそろ、別の意味になっちゃうね。

都築：韓国のイ・ジュンヨンのおっぱいの写真、あれも他とまったく違って、面白かったですね。たぶん陶器などの絵柄を360度撮れるカメラがあるでしょう、陶器が平板にね。あんなカメラで撮ったのでしょうか。あのパノラマ写真のようで、3次元が2次元の絵になっていて、全然違って見えますよ。そういうものの人体版でしょうか。こう体を見た人はいなかつたです。この場合、真正面から見ているのでほとんど皆一緒ですよ。巨乳とかも関係なくフラットになっているから皆同じように見えるという面白さですよ。逆に差異に目が行きますよ。傷がちょっとあったり、シミだったり、へそがあってね。

細江：おっぱいの形ってこのような作品で見ると非常にユーモラスに見えるね。人間の目玉みたいだね。

石井：さっき選考中のお話の中で、エイの顔とか、そんな表現が出てましたね。

田村学芸員：あるいはデジタルカメラで1枚、2枚、3枚と撮り分けて、最終的に画像合成という可能性もありますね。

都築：もしそうだとしたら、すごくうまいフォトショップワークですね。

石井：震災写真についてはどうでしたか。

都築：高木忠智さんの作品でしたか、頭抜けていたのは。粘り腰の撮影とでもいいましょうか。かなり通ってこれだけのものを撮らせてもらったということでしょう。かなり入り込んで撮っている。嫌がられて当然というシチュエーションですから。悲しい風景だけれどあまりウエットじゃない。そこがすばらしい。

細江：おそらく瓦礫の下から見つかった遺体でしょうか。こういったものに包まれたね。

鬼海：写ってくる即物的な力もあるし、それを処理するだけの引いた感覚もあるんですよ。技術も相当にあるということですよ。事件が去ったからというのではなくて、ある程度、何度も見られる作品で節度がある。

細江：この良い作品をこういう形で応募していただいて本当にうれしく思います。更に被災地で記念写真、家族写真がこうして集められている状況が作品に残されていて、関係者の努力にも頭が下がりますね。

石井：さて、2日間にわたって鬼海先生、都築先生、そして細江館長に選考をお願いしたわけですが、まとめの感想やご意見がありましたら、お伺いできればと思います。

鬼海：でも画期的ですよね。こうやって、作品がよければ35歳までずっと連続して買うというのは。普通のアマチュア写真はやっぱり、チャンスが良ければ撮れる写真だけれども、「自分」が入らない。こうやって、ずっと継続していて、いわば写真作家をつくるといういい風を吹かせているわけですよ。

都築：しかも、一番珍しいのは2回、3回と買い続ける。びっくりしましたよ、新人賞という是有るけれども、普通は1回ですからね。継続して35歳まで意欲的にサポートしていくというこのヤング・ポートフォリオは貴重な場ですね。

鬼海：ずっとこのヤング・ポートフォリオで購入された作家が、50枚収蔵となったら、40歳まで2回挑戦できるというような制度はどうです？ 何をやっているのかという。それはいいですよね。写真家というのは一本の植物のように根っこから同じものを吸い上げていて、違ったものだって枝振りが違うだけなんだから。

都築：シニア賞というのを僕はやってもらいたいですね。ヤングにはあんまり期待しない。(大笑) だって勝手に好きにどんどんやってればいいんですよ。評価は受けないかもしれないけれど、要は年取るまで変えないでほしいね。以前さる写真雑誌でコンテストがあまりにつまらないで落とされ続けた写真群から賞を選考したことがあるんですけど、画像のみで選考してあとから見ると皆70代くらいのお年寄りの作品なんですよ。やっぱり苔の一念ですーっと変なヌードを撮り続けていたりと、面白いんですよ。とにかくすごいんですよ。まあ、人の意見を、人の言うことを聞かないということですよ、一番大事なことはね。僕なんか人のいうこと聞かなかつたですから。鬼海さんだって人のいうこと聞かなかつたでしょ。

鬼海：わたくしはよく聞いた。(大笑)

都築：うそだね。大嘘。（大笑）

鬼海：だって誰もいいって言ってくれなかったもの。最初から。（笑）それは大切なことだけれど。

都築：デビューするチャンスがあるかどうかですよね。シニア賞というのも面白いだろうということです。

鬼海：いやあ、こいつ、こんちくしょーというような、こちらがそう思えるような若いやつが出てくることが必要ですよ。続けるってことは、自分で面白がっていつも新鮮な目で見ていないと面白がれないわけだから。そのためには自分に自信を持って。

都築：自分に自信を持つってことはいかに人の意見を聞かないかということでしょう。

鬼海：私みたいに聞いてかなえていくんですよ。（笑）

都築：いやいや、評価を受けられるのは稀でね、ほんとにあるかないかのワンチャンスしかないかも知れないわけですよ。今一番高い絵、ゴッホですよ。ゴッホなんか生前には評価も受けず無視されて、一枚も売れなかっただけでしょ。死んでからすごいことになっちゃったわけで、まさに神のみぞ知るですよ。第一、審査員側がすごい見る眼を持っているとは限らないですから。見てくださいではなくて、ヤングは「お前、これがわかんないのかよ」というような挑戦的な態度で応募してほしいですね。

細江：要するにわが道を行けということですよ。いろんなことを勉強する。自分のために勉強せよですよ。いろいろ人のいい作品をたくさん見ることも大切ですよ。人の作品に似ているのであったら、自分は似ていないものを作る。誰にも似ていないものを作る。独自のものができれば、それは世界に唯一ではありませんか。そうなれば世界ナンバーワンですからね。ただしそれが入賞、入選するかどうかはわかりませんよ。ですからそういうものを選んでくれるところに応募しなさいといいたいね。それが清里フォトアートミュージアムのヤング・ポートフォリオでありたい。心からそう思いますね。

石井：大変刺激的な感想、ご意見も頂き、このヤング・ポートフォリオに、よりフレキシブルでクオリティの高い独創的で挑戦的な作品がますます寄せられることを願っています。鬼海先生、都築先生、細江館長、お疲れのところ本当にありがとうございました。

（2011年7月16日、ヤマト運輸東雲美術倉庫にて）

文責：石井仁志（20世紀メディア評論）